

特集

産婦人科医が知っておくべき 婦人科腫瘍の病理学

企画者のことば

松村謙臣*

皆さんは、日常診療で病理スライドを自分で検鏡しておられますか？ 婦人科腫瘍を専門としている病理診断医は多くありません。そのなかで、産婦人科医自身が婦人科腫瘍の病理学をある程度理解し、病理スライドを自分で検鏡して病理診断医とディスカッションできるようになれば、症例ごとの病理診断の精度は格段に上がり、病態の理解も深まります。昨年「WHO Classification of Tumours」が改訂され、第5版として発刊されました。この書籍は腫瘍診断のゴールドスタンダードとされ、病理組織診断学および分子病理学が統合された内容が記載されています。そして女性生殖器系腫瘍について書かれた Volume 4 は、婦人科腫瘍を取り扱うすべての産婦人科医師が知っておくべき内容に

なっています。

また、近年、がんゲノム医療が行われるようになり、婦人科手術を行う産婦人科医は、核酸の分解を防ぐために、具体的にどのように手術摘出標本を処理すればよいのか、熟知しておく必要があります。

本特集号では、婦人科病理学の専門の先生がたにお願いして、婦人科腫瘍の病理学について、診断のピットフォール、「WHO Classification of Tumours」の改訂のポイント、がんゲノム医療のための標本の取り扱いなどについて、産婦人科臨床医が知っておくべき内容をわかりやすく解説していただきました。本特集号が、読者の皆さんの婦人科腫瘍の診療に深みをもたらすことに貢献できれば幸甚です。

*Noriomi Matsumura 近畿大学医学部産科婦人科学教室